

私の引揚体験

北海道 久米 弘

私は昭和十二年八月、日支事変と同時に未教育の補充兵として充員召集を受け当地では一番先に召集。二十一歳で故郷を後に入隊戦地に向かいました。八月半ば頃札幌を出発途中国民の歓呼の声に送られて広島、宇治港、釜山、奉天、天津、北京を経て約二十日間貨物列車の稲ワラの上で戦友三百二十人と共に万里長城下の発達領に到着。翌日より実弾射撃演習を受け前線へと戦闘を開始。二年四か月後蒙古自治政府成立と同時に戦友の凱旋を見送りながら現地除隊で蒙古政府に就職しております。首都張家口市は人口十八万人中日本人二万人蒙古人五万人、中国人十一万人で日本領事館があり内蒙古の玄関口の都市で家畜羊毛の貿易の集散地でした。

生活も安定し年頃になったので昭和十九年二月一時帰郷し隣町より妻を迎え、戦時中灯火管制の下の苦しい旅

行をしながら十五日間かかり無事張家口に到着しました。当時の日本は食物もなくみじめな印象であり、それに引換え張家口ははまだ生活にこと欠くこともなく物資が豊富で初めての妻も不安ながら安心して生活出来るので喜んでいました。ところが張家口へ到着後一週間で現地召集を受け昭和十九年二月末中支川南省へ向け出発し、妻もいまだ他国に来て十日とたっていない言葉も判らないし、さぞ不安であったと思うがいつでも日本に帰るようにと友達に頼んで心を残して出征しました。

妻も同じ大陸でいつか新婚の夫が無事で帰る日を祈りながら留守を守っていたようでした。

以下妻の言による引揚状況

昭和二十年八月ソ連の参戦により外蒙古より侵入に備え憲兵の指示に従い、日本人学校に集結することとなり皆自決をするものと思い、女心をせめて晴着で死にたいとリュックに詰めて家を出たが途中で駅に行くよう指示され、初めて引揚げるのかと思った。無蓋車に乗せられ横になることも出来ない人の波で十二時間のところを五日間もかかり途中鉄道の破壊、匪賊の襲撃等あり、飢と

栄養失調で大半の子供が死に、停車毎に鉄路側に捨てて地獄の様相であった。

我々は無事天津に到着收容されたが、ここでも毎口のように死人で悲惨なものであった。十二月末無事に日本に引揚げ故郷に帰宅することが出来た。私は河南省各地を転戦し無事生き永らえ、八月終戦と同時洛陽で武装解除を受け、現地で在支の長い現地召集の戦友三十人と解除を受け、家族の引揚げ地天津に向ったが目的を果せず四か月間終戦後の大陸を迷い、三月末日連雲港から佐世保に上陸、帰路の鉄道は窓から出入し苦しい車中であった。無事に故郷に帰れる喜びで一杯であった。車窓から見る本土の焼ヶ野が原と化した姿を見てよく戦ったものだと思った。

四月初めに帰宅し、先着の妻と二年振りの再会でお互いに無事を喜び合った。

引揚後故郷の役場に就職三人の男の子に恵まれ日夜夫婦努力し今では三人の子供も独立し、孫も五人もみながら年金生活をしております。今でも時折終戦引揚等の夢を見て当時の悲しみを思い出します。

恐怖と絶望の日々

福島県 土田 ヒサ子

昭和二十年八月九日、忘れもしないソ連参戦のニュース……。私共の街、北支・平地泉はソ連領から飛行機で五、六分の至近距離だった。領事館の命令で、老人婦女子は、早急に荷物（食糧、衣類）をリュックに入れ、十日早朝駅頭に集合とのことだった。全員無蓋車に乗せられ、七時出発した。八月でも朝夕は寒気厳しく、心細さと不安感で手足がぶるぶる震え、誰も口をきかなかつた。主人は職務上同行不能だった。

私は六月に長女を出産したばかりで、身体はくずれず、友人の世話になりながら、夕刻張家口に到着した。その夜、鉄道宿舎に宿泊することになった。風呂にはいろうと衣類を脱ぎ、わが子を抱いて湯ぶねにはいろうとしたとたん、八路軍来襲とのこと、これが最後かと思つた。十五日、ラジオの前で終戦の詔勅を聞き、皆で手を